

千刈狸の呟き

～ 名前のない障害 ～

麻疹、風疹、水痘など先人達が命名してその名を継承している発疹症が沢山ある。ところがこの頃、たまに見るけれど、まだ名前のない発疹症に遭遇することがある。リンゴ病や手足口病などは、実は数十年前に命名されたものだ。見たままの命名で誰が言い始めたのかと想像してみるのも面白い。昨今のマスコミが頻用する造語みたいなものかもしれない。

名前のないものに正式に名前をつけるには、川崎病のように、相当研究を積まないといけないので、今度、名前のない発疹症に出会ったら、身内で命名してみたいと思う。大抵は軽症なので名前がついていないんでしょうから...と保護者と一緒に「指間ポチポチ病」とか「プチプチ熱」とか名づけて様子をみましょう、という感じ。でも皮膚科の先生が診たらもうとっくの昔にちゃんと名前がついてたりして...全くなんでこう適当なんだらう。

本題に入ろう。

最近の精神科の診断基準や診断名については専門家でないので適当なことをいってられないのだが、気分障害、不安障害、適応障害など障害という言葉が多数出てくる。社会不安障害やアスペルガー障害など最近新しく命名された障害だと診断され、そのことを受け入れて治療し社会で生活できるようになったという人々の手記も多数発刊されている。

一方、病的と言えるほど何でも適当な人というのが結構あちこちにいる。(私も含む) 名前のない障害なのだろうか。特別本人も苦痛でなく、世間様にもそれほど迷惑もかけていない場合と大変な迷惑をかけているのに気がつかない場合とある。「適当障害」などと名前をつけて、もう少しまともにやりましょうと専門家から進言していただきたい「エライ人」もいる。

なんでもかんでも首をつっこんであれこれと嵌っていく「ぼっこれたまくら」というのも、おそらく名前のない障害である。

その昔、地域医療に携わる者の最も大切な事は、「何にでも対応すること」であると学び実践してきたつもりだ。ふと気がつく何にでも対応しているうちに何にでも首をつっこんでいる。まだまだ私は「ぼっこれたまくら」の二つ目というところだろう、どこか徹しきれていないから。

あちこちにこの類の「真打」級の人々がいることに感動し勇気づけられる今日この頃である。その人達は大抵小さい頃から少し変わった子供だった、と恩師や幼なじみに言われる。アホじゃないのかと思われる事を鈍重にやり続ける。くさらず、おごらず、決してあきらめず、屈しない。何故かいつも妙に明るい。名前のない障害によって世界をより豊かにしてくれるのだ。

村上和雄筑波大学名誉教授の著書「アホは神の望み」の中に「役立たずで無駄なものほど大きな突破口になる」とある。今の世の中の閉塞状態を、突破していくパワーを持つ人々は無数にいる。「適当」や「ぼっこれたまくら」の他にも神の望みである名前をつかない障害を持ちながら、十分に発揮していない人がいるはずだと期待したい。

では、いったいどうしたら良いのか？

これを読んでどこか心あたりのある方は、その調子で、ますますご活躍いただきたくよろしくお願ひ申し上げます。「訳のわからない宗教みたいで意味不明」と訝しく思われた方は、順調に生きておられる証拠です。その調子でますますのご活躍をお祈り申し上げます。

(月影の狸)